



燎原社  
(京都の民主運動史を語る会)  
代表 岩井忠熊  
事務局  
京都市左京区高野東開町1-23  
第三住宅33-302 井手幸喜  
〒606-8107  
tel & fax 075 (722) 3823

## 京都総評の結成 1951年5月27日

### この一枚



上 = 「京都総評」創刊号 (1951年8月20日) と、生活擁護市民大会を報じる同紙第3号  
左 = 京都総評が主催して生活擁護市民大会を開催。集会のあと初の提灯デモ (51年10月19日)

私の高山市政論 (1)

京都総評の思い出 結成60周年を迎えて

京都における沖繩返還運動 (中) ——「沖繩・小笠原返還同盟」府本部へ発展

〔連載〕彼らを通すな ——立命館「大学紛争」のなかの青春 (3)

鳥取「平和祈念塔」の思い出 青年時代、反戦・平和を希求して

〔資料〕戦火に巻き込まれていた大学 戦時下の京都の大学で教授は何をしたか (2)

忘れ得ぬ人 生誕100年、西山卯三先生の思い出

京都人文学園65周年同窓会を開催 10 催しガイド 11

BOOK 13 会員消息 / 例会案内 / 編集後記 16

清水 武彦	2
宮田栄次郎	4
佐次田 勉	6
鈴木 元	8
蓮佛 亨	11
中島 晃	14

「再軍備反対、憲法擁護」生活擁護市民大会も開く

京都総評結成大会は1951年5月27日、京都労働会館（下京区寺町四条下る）ホールで開かれた。「国会解散、吉田反動内閣打倒」「再軍備反対、憲法擁護」「特需に名をかる労働強化反対」「働くための最低賃金制確立」「政治活動の制限絶対反対」など9本のスローガンが掲げられ、議長・加賀田進（総同盟）、事務局長・黒田誠一（新産別）らを選んだ。

折しも当時の政治情勢は講和条約をめぐって全面講和か単独講和かの論議が高まっていた。9月、政府はサンフランシスコで単独講和条約と日米安保条約を結んだ。京都総評の初仕事は平和運動の強化であった。

10月には「生活擁護市民大会」を主催し、戦後最初の「ちようちんデモ」を繰り広げた。また8月20日に創刊されたタブロイド2頁の月刊機関紙「京都総評」が、これらの闘いを報じた。（「京都総評50年」より）

（4面に宮田栄次郎氏の「京都総評の思い出」を掲載しています）

# 私の高山市政論

(1)

## 清水武彦

(元京都市経済局長)



7月2日に開かれた本会2011年度総会での清水武彦氏の記念講演(要旨)を数回に分けて掲載します。

### 高山市政は「保守・反動市政」か

高山義三氏は、周知のとおり、一九五〇年二月、社会党公認、共産党推薦、全京都民主戦線統一会議(民統)支持の候補として京都市長選挙に立ち、田畑磐門京都市助役、和辻春樹元京都市長の保守系候補を破って当選しながら、一九五二年二月、無所属を宣言し、一九五四年二月の市長選挙に革新系候補と対決して再選、以降、保守系の支持を受けて三選、四選したため、今に至るまで「変節漢」のレッテルを張られています。

私も後で述べるように、「高山市政打倒」の旗を掲げて闘う京都市職員組合(以下「市職」、現「京都市職労」)の本部・支部役員として戦列に加わっていました。確かに高山市長は、市職・市労連にとっては、要求を入れないばかりか、賃金を抑え、臨職を増やし、闘えば処分を繰り返す憎

い相手でしたが、では、市政のどこが「打倒」すべき「保守・反動」なのか、疑問に思っていました。

それは、労組と厳しく対決するくせに、職場には批判の自由があり、福祉や文化などの面に先進的な行政が多かったからです。

私は高山市政の後、井上・富井・船橋・今川市政の下で二十年勤めましたが、いろいろな職場で高山市政が遺した業績に出会いました。高山市政から四十五年経った今日、改めて振り返っても、高山市政には学ばべき業績が多いという感を持ちます。この違いはどこからくるのか、それを私なりに考えてみたいと思います。

### 私と高山市政

私が京都へ来たのは一九五〇年四月に大学へ入った時でした。二月に受験に来たのですが京都市長選挙は知りませんでしたから、メーデーで

蟻川知事と高山市長が大山郁夫参院選候補と三人でデモの先頭に立っている状況には驚きました。

一九五三年卒業後、京都に留まる必要ができ、当面の職を求めて京都市役所を訪ねました。財政難で正職員の採用はなかったので、日給・月給の臨時職員として民生局の上京民生安定所に入職しました。賃金は軍人遺族援護事業費から出ていました。

社会福祉関係の法令や制度が次々に作られ仕事が増えるので、民生局にはさまざまな名目の臨時職員が多くいて、予算がつくと少しずつ正職員に採用されていくのでした。

私の場合は翌年一月、青少年問題協議会法によって市に協議会ができた時、事務局担当の嘱託になりました。会長は戦前の社会部長で一九四二年に治安維持法違反で検挙され退職した漆葉見龍氏でした。

丁度、一九五四年二月の市長選挙の直前で、市労連は「高山打倒」を掲げ、革新候補の西園寺公一氏を支援して闘っている最中でした。

京都市労連は一九四六年結成後、一九四九年二月に交労の梅林信一委員長が政令二〇一号違反で解雇、八月には市職の吉田平、三宅勝がレトリパージで解雇されましたから、一九五〇年の市長選挙で、民統会議(議長・梅林信一官公労議長)の中核として全力で勝ち取った高山市長には大きな期待をかけていたわけです。

### 執筆者紹介

清水武彦(しみず・たけひこ) 元京都市経済局長。

宮田栄次郎(みやた・えいじろう) 京都社会労働問題研究所、元京都合同繊維労組委員長。北区在住。

佐次田勉(さした・つとむ) 元沖縄返還同盟京都府本部事務局長。沖縄県うるま市在住。

鈴木元(すずき・はじめ) ジャーナリスト。中国(上海)の同済大学アジア太平洋研究センター顧問教授。西京区在住。

蓮佛亨(れんぶつ・とおる) 建築家。本会会計監査。宇治市在住。

中島晃(なかじま・あきら) 弁護士。まち

それが一九五一年の市労連年末闘争では鷹野種男委員長や中内広等七名が解雇され、一九五二年七月の市・区職首切り反対闘争では山田幸次市職委員長はじめ二二名が解雇されて、事実上解体させられたのでした。一九五四年二月の市長選は組織再建をかけた闘いでもありましたが、西園寺は一二万七千票で高山の一九万票に敗れました。

この年の六月に正職員に採用されて民生局保護課児童係に配属されました。民生局は「ゆりかご」から墓場までのスローガンによるほとんどの分野に関わっており、私も五年間、保育所行政を中心に担当しました。

国民の権利としての社会福祉、部落解放を目指す同和行政という指導を受け、乳児保育、夜間保育、障害児保育、

職親制度など先進的な児童福祉行政を担当してやりがいを感じました。しかし、一九五六年、政令指定都市になって社会福祉行政の権限と義務が府から移譲されたにもかかわらず、財政再建計画による超緊縮財政になり、さらに厚生省の締め付けも厳しくなつて、「先進的」と言われる民生行政にもさまざまな歪みがでてきました。

### 「高山市政打倒」の戦術に疑問

一九五八年二月の市長選挙でも革新は十万票の大差で敗北しました。

私は市労連・市職の「高山市政打倒」の戦術に疑問を抱くようになりました。市民の支持を得られないのは、高山市政のどこが悪いかを明らかにせず、自分らの要求ばかり掲げているからではないのか、と。

四月の役員改選期に私は民生支部長・中央執行委員になりました。

この年の支部定期大会議案の「民生局内外の情勢」の中に私は次のように書いています。

「今期の高山市長の公約のなかに、西京極グラウンドの夜間設備と国際文化観光会館（注・現京都会馆）の建設という莫大な金がかかる事業がある。ところが私たちが働き、市民が利用している市の施設の腐朽はひどいであろうか。壁は落ち、かしいでいる保育所があるかと思えば、児童院の産科の分娩台に天井のシックイ



1950年、メーデー行進の先頭に立つ高山市長、蜷川知事、大山参議院議員候補（左から）

### 市職初の住民共闘で成果

が落ちてくるようなありさまではないか。指月寮の廊下には汚水がたまり、便所は悪臭をはなち、一嵐がくれば崩壊しそうな現状のなかで子どもが「保護」されている。火葬場のかまは骨董品で、ムシ風呂のような作業場で汗を流している職員には十分な作業服さえ与えられていない。目立つ所には金を使うが目立たない所には金をおしむ高山市政を「うわべだけの市政」と断ずるゆえんである。（以下略）

市職中闘は、当局の交渉拒否、昇給一方面的実施の中で、夏期手当交渉に向けて待遇改善要望の市会請願闘争と職場闘争を指令しました。

びかけて革新系議員を含む市職規模の市民共闘会議を設置して市会へ働きかけた結果、九月市会で共闘関係請願は全会一致で採択され、市当局は十一月の臨時市会に民生施設改善費、保育料負担軽減措置費、民間福祉施設援護費を含む追加予算案を提案、翌年度にかけて請願関係の必要事業費はほぼ満額予算化されました。この間、労政当局は市職本部に団交を申し入れ、夏期手当は初めてプラスアルファを獲得しました。市職初の住民共闘でした。

民生支部は独自に、市民要求に立った民生行政改善を掲げた市会請願闘争を決定しました。請願の内容は、社会福祉行政充実のため、担当職員増員、市営施設の補修、乳児保育所定員の増加、民間福祉施設職員の待遇改善、保育料の引き下げ、日雇労働者の就業日数の増加、環境改善事業費の大幅増額など九項目を掲げ、現状、改善策、必要予算額の詳細な説明資料と共に提出しました。

平行して請願書を提出している保育園長会、保母会、総評保育所を作る会、民間福祉施設職員有志、全日自労に呼

都会館などを使った文化事業を担当していましたが、一九六二年の市長選挙に当って高山四選反対で闘った市職に対して、当局は本部三役を分限免職にするという報復が加えられました。再建執行部は社共統一ということになり、私は書記長に選出されました。団交拒否、組合費天引拒否の中で、解雇三役の敵対闘争と組織防衛に努めました。二回の組合費値上げ投票に絶対過半数が取れず、一年半で総辞職することになりました。一九六三年九月に企画局企画第一課主査に配属され、総合計画試案の福祉・保健・公害計画を担当することになりました。（以下次号）

# 京都総評の思い出

—— 結成60周年を迎えて ——



## 宮田栄次郎

(京都社会労働問題研究所)

「右翼」から出発して「左翼」へ

京都の労働界におけるローカルセントラーの一翼を担う京都総評が、このほど結成60周年記念の集いを開いた。傘下の合同繊維労組の専従役員で京都総評の常任幹事を務めたことのある私も招かれて出席したのだが、当時の同僚の多くは時の流れとともに幽明境を異にしていて、一抹の寂しさを禁じえなかった。

京都総評は現在組織人員6万余、「右」の連合京都（9万余人）に対し、日ごろ共産党と行動を共にする「左翼」とみるのが常識だろうが、初めからそうだったわけではない。むしろ、結成時のいきさつからは、「右翼」といってよい存在だった。

その誕生は1951年5月27日、14単産・4万7500人での旗揚げである。米ソの冷戦が朝鮮で本物の戦争に転化して火を吹き、アメリカ占領軍は朝鮮への出動で手薄になっ

た後を日本人の警察予備隊（自衛隊の前身）で埋めようとしており、その際目障りな共産党を全国の職場から締め出そうとするレッドパージが吹き荒れた直後だった。前年発足した総評（日本労働組合総評議会）は、占領軍のお墨付きの下、それまで日本の労働運動をリードしてきた共産党主導の産別会議に取って代わるうとする狙いをもっていた。

京都総評の正式名称は日本労働組合総評議会京都地方評議会といったから、明らかにその京都におけるブランドに他ならず、大会宣言にも「極左政党的組合支配と暴力革命的組合利用を徹底的に排除し、自由にして民主的なる労働組合……云々」とあるように、当時、武力革命路線にあった共産党と一線を画して社会民主主義と社会党支持を目指していた。京都では前年、共産党指導下の民統（全京京民主戦線統一会議）が京都市長選と府知事選とともに勝利

して気を吐いたが、京都総評はこの民統系労組への斬り込み部隊にほかならず、これに対し、民統系労組は京都総評を「民同派」民主化同盟派「反共・御用組合」と決めつけ、ともに天を戴かぬ「仇」のような間柄だった。

## 労働界の牽引力に

ところが、情勢の変化は急だった。中央の総評は一年もせぬうちに「ニワトリからアヒルへ」（当時のマスコミの評）脱皮、全面講和・再軍備

反対・軍事基地提供反対・中立堅持の「平和四原則」を打ち出し、米占領軍の期待を裏切って「左」に舵を切り、左派社会党の有力な支持団体となるのだが、一方、武力革命路線に行き詰まった共産党も「総評なだれ込み」の方針に転じていく。

京都でも1952年秋以降、京教組・府職労など有力な民統系組合が相次いで京都総評の陣列に加わり、「なだれ込み」の完了した1957年には、京都総評の組織人員は結成時の2倍に当たる9万人を超えていた。

その後も京都総評は社会党右派と民社党の率いる民間労働（のち全労、同盟）を抑えて組織を伸ばし、1976年には最大の14万人（京都全体の組織労働者の中の割合は54%）にまで達した。

量の発展は必然的に質の変化を伴う。結成当初の京都総評執行部は社会党の独占するところで、一人の共産党員もいなかったのだが、1953年秋以降、運動の活性化に伴い大会代議員中の共産党系の進出は次第にすすんだ。しかし、執行部内におけるその比重は、社会党の抵抗のため遅々として高まらず、共産党系大会代議員がついに多数派となった1976年でも3割足らずで足踏みしていた。



京都総評第7回大会（旧労館、1957年9月14日～15日、演壇は那須事務局長）

## 熾烈だった社共の争い

この間、大会の主導権をめぐる社共の争いは激しさを増し、京都総評の大会騒動が常態化していく。手許の資料によれば、結成以来の60年間に退場5回、休会7回、流会3回、大会開催不能4回、計19回というさまざまさである。それも、社会党支持の組合が相次いで離れて連合を指向した1989年に執行部体制が共産党主軸に移ってからはこうした大会騒ぎはビタリと収まるのだから、結成直後の無風時代と合わせた時期を除いて割り直してみるとほぼ2年に1回の頻度となる。

大会紛争の種は役員的人事、原水禁運動、選挙・政党支持、労働戦線統一のあり方などその時々で様々だが、多くは「京都」の「労働組合」という限定の下では解決不可能な、全国的・政党的課題であり、必死の論戦で汗をかきただけ「不毛の脱力感」を伴うテーマに他ならなかった。

1953年に始まる紛争のサイクルは、最初、5年周期だったが次第に加速し、大会代議員の構成が共産党系多数に傾いて以降は、社会党側の抵抗が一層頑なになって、毎年のように大会は荒れ、ついには大会そのものの開催さえ不可能となる事態がつついた。

京都総評がこのような半身不随の状態に苦悶しているかたわらで、中

央における労働戦線再編は進み、1989年までには、総評・同盟・中立労連・新産別といったナショナルセンターがいずれも解体して、連合（日本労働組合総連合会）・全労連（全国労働組合総連合会）・全労協（全国労働組合連絡協議会）の3団体時代に移り、これまで中央で社会党系といわれた単産が連合に結集、その京都の下部組織も京都総評を離れて連合京都に加わっていく中で、ようやく京都総評の内紛は終止符を打つことができた。そして連合は、現在、民主党の支持に移り、かつて総評を牛耳ってきた社会党とその後身の社民党は、労働運動への影響力を失っていく。

## 日本労働運動は再起するか

中央総評の解体にともない、各府県評もあいついで解散していくのだが、京都の対応は一味違った。京都総評は解散しなかったばかりか、それまで未加入だった「左派組合」を吸収（当時、京都の統一労組懇8万のうち約1万は京都総評未結集）、名称もこれまでの日本労働組合総評議会京都都地方評議会から京都都地方労働組合総評議会（略称は従来どおり京都総評）と改め、連合京都と対峙する道を選んだ。そのシェアは全国が連合67%、全労連6%、全労協1%、中立26%なのに対し、京都では連合京都49%、京都総評32%（現

在）と、全府県のなかで非連合がダントツの大きさを誇っている。なお、京都総評が中央では全労連だけでなく共闘組織の全労協にも加盟している点もユニークである。

以上のように、京都総評はいまや京都の革新勢力の中核部隊なのだが、依然大きな「泣きどころ」を抱えている。それは、組織の実態が官公労働者主体であり、民間部門の多くも第二次産業の製造業でなく第三次産業のサービス業に属していることである。官公労主導の運動は往々にして後進国に多くみられるが、ともすれば政治イデオロギー先行に偏りやすいのだから、今後の京都総評の組織作りの力点は民間の第二次産業部門におかれることが望ましい。

官公労主体という弱点は、京都だけでなく、全労連全体にもそのまま共通する。厚生労働省の調べによる組合員の産業別分類では、六七〇万人の連合が製造業三二・二%、卸小売業一三・九%、公務一〇・七%などとなっているのに対し、六三万人の全労連は建設業二七%、公務二〇・八%、医療・福祉一八・四%、教育一二・三%などから成る。

ところで、いまの労働界は「昔・陸軍、今・総評」といわれたころの迫力に欠ける。雇用者数で組合員数を割った組織率は、1949年の56%を頂点に減少の一途をたどり、今では18%まで落ち込んでいる。闘

争力を示す労働損失日数も、33%賃上げを獲得した1974年や、翌年、公務員のスト権奪還めざして長期闘争を闘った頃と比べるべくもない。当然、闘いの成果も微々たるもので、労働「組合経営」あつて労働「運動」なし、「歌を忘れたカナリヤ」と揶揄される有様。実力体制を背景にした闘争力強化という原点に立ち返った運動の再起が待たれること、京都も例外ではないのである。

## 京都総評は市長選をどう闘うのか

京都では来年の2月に京都市長選がある。4年前は現職の引退に伴う新人4人の争いとなり、京都総評の推す中村和雄弁護士が門川大作・現市長に951票差まで迫る接戦を演じた。今のところ今回もこの2人による一騎打ちとなりそうな気配だが、再選目の現職は保革を問わず最も強いとされる。4年間の行政担当で知名度が上がるが、飽きぐるほど長くもないからである。

万一、これまでと同じパターン化した取り組みでは、またぞろお定まりの「善戦・健闘」という総括の繰り返しに終わることにならないか。京都市職労を先頭にした京都総評が、どのような新しい戦略・戦術を打ち出すか。お手並み如何と待望しているところである。

# 京都における沖縄返還運動

中

佐次田 勉

「沖縄・小笠原返還同盟」府本部へ発展

(元沖縄返還同盟  
京都府本部事務局長)

## 沖縄認識の誤り

歩みをはじめた「沖縄守る会」の日常活動の柱は「ありのままの沖縄」を知らせ、学ぶことであった。当時、人びとの沖縄に対する事実認識は低く、誤解も多かった。私自身、立命

に入学した当初、学友から「君は英語が得意だろう、高校まで英語の教科書だったの？」と声をかけられ、思わず「エッ」とびつくり、屈辱を味わったことがあった。沖縄県出身の学友たちほとんどが体験したそうである。本土に修学旅行に来た沖縄の子ども達が宿泊地の従業員に「日本語が上手ね」とほめられて悔しい思いをした、との話を聞いて胸が痛んだ。次のような調査結果がある。1967年に日教組が東京の中学生を対象にしたもの。

沖縄は？

38%

日本の領土である

57%

さらに、同じ時期に東京学生沖縄文化協会が成人を対象に実施した調

査結果がある。

沖縄に適用されている憲法は？

日本国憲法

8・2%

アメリカ合衆国憲法

44・3%

(両調査とも)く一部の紹介である)

この数字は深刻である。沖縄への事実認識の低さ、誤解は沖縄返還運動を全国的な規模にひろげるうえで大きな障害となる。障害は取り除かねばならない。「守る会」は、沖縄の米軍基地の実態、事件・事故、県民の闘いを学習、宣伝すると同時に「ありのままの沖縄、日本の沖縄」を知らせ、学ぶことをかなり重視した。

ところで、この沖縄に対する誤った事実認識を植えたのは何か。それは、沖縄の歴史の特殊性と米軍による軍事的植民地支配によるものである。すなわち、琉球王国→島津藩による圧政と収奪→明治政府の差別政策→そして米軍による全面占領支配である。さらに日米軍事同盟を最優先してきた日本政府の対米従属の政治である。この構図は現在も維

持され日本国民の苦難の根源となっている。

## 百日超える沖縄行進・ 壮大な海上大会

さて、1964年8月、米国は

「トンキン湾事件」を口実に北ベトナムへの攻撃を開始した。この年の1月、米軍はベトナム侵略戦争を秒読み「段階とみて沖縄在の海兵隊に読み」段階とみて沖縄在の海兵隊によるクイック・リリス(緊急発進)作戦の演習を開始していた。沖縄は一挙に緊迫した情勢をむかえ、県民の抗議行動が展開された。「守る会」もただちに街頭でベトナム人民支援の募金と署名活動を展開した。

一方、中央段階では、共産党、平和委、AA連帯、労働団体など50数団体による沖縄返還中央実行委員会連絡会議(沖実委)が結成され、沖縄のたたかいと呼応する方針が提起されていた。それは、4月28日に東京を起点に8月15日に行われる海上大会に向け、西日本を縦貫する百日余にわたる沖縄返還要求国民大行進

であった。東京を出発した行進は、6月3日に京都入りの予定となった。そうしたなかで沖縄返還要求京都実行委員会(委員長末川博)は、府下行進の日程を設定し、行進の目的を確認した。目的は「日本の独立とアジアの平和と深く結びついている沖縄返還を京都府民にアピール」し、各自治体に返還決議を要請するとなっていた。

予定通り6月3日、京都に到着した行進団を迎えての京都大集会には2000名が参加、蜷川知事よりメッセージも寄せられた。そして集会は、京都で開催されることになった第10回原水禁世界大会の成功と海上大会に京都代表団を送ることを大きな拍手で確認した。発足したばかりの「沖縄守る会」は、府下行進を労働者と学生を中心にリレーでつなぎ、連日、街頭では海上大会派遣への募金活動を取り組み5名分の派遣費用を集めきった。

8月15日の海上大会は文字通り壮大な大会となった。それまでは、本土と沖縄あわせて40名ほどの海上交歓会であった。ところが今回は、本土側500名、沖縄側170名参加の大規模な大会が民族分断の北緯27度線上で展開されたのである。京都からは、田畑シゲシ団長(共産党府副委員長)ら19名が参加。大原での集会はほぼ全員が初体験であり、船上は心地よい緊張感に包まれてい

た。そんな時、突然「オー、沖繩の船が見えたぞー」と歓声があがった。その後は興奮のるつぼである。その模様を京都代表の女性が初めて書いたという詩で一部だけ紹介したい。

船が見えたぞー 沖繩からの船だ 米軍の妨害をはねのけてやってきた 沖繩県民の団結の船だ あたりに はためく赤旗 甲板を走る人びと 手を結びあう人びと そして歌沖繩を返せ 波がうねり 船がゆれる わきあがる シュプレヒコール 沖繩を返せ 米軍のヘリが上空を旋回する アメリカは出ていけ アジアから出ていけ 波はうねり 船はゆれる (後略)



民族分断の北緯27度線での海上大会

けられた。呼びかけは燎原の火の如く全国に広がり、その年の7月30日に結成の日をむかえた。総会には、

全国42都道府県から188名の代表が出席し、正式に「沖繩・小笠原返還同盟」が結成された。日常的に返還運動をすすめる組織が誕生したのである。この総会で3名の議長の一人として寺前巖京都府議が務めていたことは感慨深い。

全国組織の結成を受けて「京都沖繩守る会」も総会を開き、「沖繩・小笠原返還同盟京都府本部」に発展解消することになった。私は、その年の4月に「守る会」の専従の任に就いていたので活動の継続に支障はなかった。

スタートした返還同盟の組織活動の重点は「班づくり」であった。早い反応があった。沖繩行進、海上大会に参加した人たちが、それぞれ自分の使命であるかのように頑張った。たちまち、全自交、府職労、全

日自労、自治労傘下の職場をはじめ日本レースなど民間企業や立命、京大など8つの大学、府下でも4市4町村で班が結成され京都での平和・民主運動の一翼を担うまでに成長したのである。

沖繩返還運動は、日本の主権回復であり、ベトナム戦争反対、ベトナム人民支援に直結する闘いであり、真の地方自治確立の課題でもあった。それだけに日常的な沖繩返還運動は安保条約廃棄と結んで京都府民に共感の輪を広げていった。京都府本部スタート後、僅か2年で約600名の会員を擁するまでになった。運動の発展とともに「沖繩は日本ですか」との質問も聞かれなくなった。この年の「日本のうたごえ祭典」で発表された組曲「沖繩をかえせ」に次のような歌詞があった。

軍用道路に6時間  
佐藤をむかえる10万の赤旗

“売国奴佐藤かえれ”

“沖繩は日本のもの”  
真白な国道1号線  
ベトナムに続くこの道  
今叫びはひとつとなつて……

沖繩返還闘争は、ベトナム人民支援の国際連帯のたたかいそのものであった。(次号につづく)

## 沖繩・小笠原返還同盟の結成

1965年、新年早々もたれた日米首脳会談は、沖繩の米軍基地の重要性を強調した共同声明を発表し

この海上大会の画期的な成功は自覚的民主勢力に深い感動と確信をあたえ広げた。そして、沖繩県民の闘いと呼応し共闘の絆を強め、促進する全国組織結成の気運を急速に高めた。

この時期である。平野義太郎、木下順二、平塚らいてう、深尾須磨子ら各界の著名人30氏によって沖繩返還を求める全国組織の結成が呼びか

た。その一か月後の2月8日、沖繩の米海兵隊ミサイル大隊は南ベトナムに上陸、ベトナム民主共和国への本格的な侵略戦争を開始した。演習の激化、米兵による事件・事故で沖繩は「戦場」と化した。

# 彼らを通すな

## 立命館「大学紛争」のなかの青春

■第3回■

鈴木 元

1965年私は2回生になった。

この年、産業社会学部が創設され経営学部が使っていた恒心館が産業社会学部の学部基本棟となった。そして私が在籍していた経済学部と経営学部は理工学部があった京都市北区の衣笠キャンパスに移転した。

立命一部の統一派も広小路キャンパスと衣笠キャンパスに分かれ、私は4月から衣笠キャンパスの副責任者（初代の責任者は経営学部の皆本幸生）となり、9月からは責任者となった。そしてこの年から衣笠キャンパスの統一派では夏休み、春休みに合宿し意思統一を図った。夏は西山にある三鈴寺か善峰寺、冬もしくは春は北山の高原にある念仏寺で行った。

衣笠キャンパスでは、二部の理工学部自治会ボックスを昼間使わせてもらうことになり拠点もできた。

一回生の時のプロゼミ（入門ゼミ）はなくなったが、二回生には外書講読があった。私が受講した外書講読のテキストはマルクスの「賃金、価格、利潤」（英語）であった。

すでに浪人時代にソビエトの「経済学教科書」の学習会に参加し、多少マルクス経済学をかじっていた私はこの外書講読のクラスでの討議を通じて存在感を持つことができ、再び有志の学習会を組織することができた。

### 経済学会学生委員会で活動

私は、自治会の自治委員や学友会の代議員に選ばれていたものの日常の自治会活動では事実上排除されていたので、経済学会学生委員会の活動に参加することにした。経済学部所属する教員だけではなく形式上、院生、学部生も経済学会の構成メンバーであった。また教員・院生・学生の参加で「園遊会」の開催や、経済学部らしく工場見学などの行事が行われていた。また年一回、学会誌の特集号として「学生論集」が発刊されていた。この選考会や編集作業に参加していた。

当時の自治会はいわゆる学生運動に関心がある活動家のたまり場であり、実際にはセクトの傾向が強かつ

た。しかし経済学会学生委員会はそうした学生運動とは距離をおく勉強熱心な学生のたまり場であった。しかも経済学に関してはマルクス経済学よりも、どちらかというと近代経済学を志向する学生が多数であった。

その年の学術講演会のテーマは「経済白書を読む」であった。私ははじめに経済白書を読むとともに、新日本出版社から発刊された雑誌「経済」の経済白書批判を読み、事前学習会で一席ぶったが、今となってはどれほど説得力があったかは心もとない。

しかし私は近代経済学に接することによって、逆にそれを刺激剤としてマルクスの「資本論」とまじめに格闘した。二回生、三回生で読み切っただけではなく、第一巻に関して三回以上読んだ。

こうして次第に学生委員会の中で、また担当しておられた先生方の中で信頼を得ていった。三回生の時には、私の相棒になっていた井谷隆君が選挙で学生学会運営委員長に選ばれた。そしてその年の秋の学術講演会では、近代

経済学を学ぶ学生達も納得して、マルクス経済学者・宮川実氏を迎え、「資本論について」講演していただいた。

当日は定員1000名のホールが満員となる大盛況であった。ところが講演中、突然夕立による停電が起こった。薄暗くなり、マイクも止まった。しかし宮川先生は全く動じず一言の断りもいれず、そのまま講演を続けられた。会場は水を打ったように静かになり、先生の堂々とした肉声だけが響いた。終わった時には万雷の拍手が起こり大成功した。

### 多様な文化活動を結集して

一方、自治会活動で言えば、日韓条約反対、アメリカのベトナム侵略反対などの政治課題が大きく浮上ってきていた。

当時、ジュネーブ協定締結10周年を記念して、ベトナムを訪問した共産党の平田敏夫市会議員にお願いし、理工学部の階段教室で帰国報告会を開いた。平田さんが持ち帰った記録フィルムを私が映写機を回して上映した。

また、南ベトナムでアメリカの支配を打ち破る闘いに参加していた青年グエンバンチョイが、サイゴンの街中で公開処刑されるといふ事件があった。その青年の生き様を描いた「あの人の生きたように」という本を演劇にして広げようと、理工学部の丸山君がシナリオを描き、経済学部

の岸上君などが演じた。私は観客を組織する側であったが以学館の大教室でこの劇が演じられた。

当時、京都の学生運動は自治会活動だけでなく多様な文化活動を結集する取り組みも始めていた。1963年秋に第1回京都学生学術文化会議が14大学、延べ700名の参加で開催されたが、1965年の10月29日第2回京都学生文化会議が28大学の参加で開催された。この集会上において「あの人の生きたように」が演じられた。

経済学部以外の学部でも多少の違いはあるもののクラス、サークルを基礎に学生の要求に基づき地道に活動を広げ、次第に影響を広がていった。全学的に広く組織する行事として「うたごえ祭典」があった。うたごえサークルである「合唱団若者」が中心となって実行委員会を作り、クラスを単位に全学のうたごえ祭典を毎年開催していた。私も一回生と二回生の時、クラスをまとめて祭典に参加した。また、理工学部のメンバーが中心となって若者の間で広がりをはじめていたスキー祭典を開催したりしていた。

こうした私たちの地道な活動に対して「新左翼系」の学生たちは「キチキチバツタのアンボンタン」、つまり「一つ覚えのように基地、基地ばっかり言うているバカ」と揶揄したり、「踊って歌っての民青」と馬鹿に

したり、「革命を忘れた要求闘争ナンセンス」と中傷したりしていた。

しかし、1965年の春の自治会選挙で、ついに一部文学部自治会委員長選挙で統一派の代表が委員長に選ばれた（私と同じ1964年入学の中西七生）。

### 暴力に屈しない姿勢貫いて

こうして統一派が多数者に転換するころから執行部による暴力が横行しはじめた。私たちは毎日朝八時半に集合し打ち合わせを行い、九時から始まる一時間目の授業の教室にオルグに入った。皆でお金を出し合っ作った立看板を、夕方下校時には、片付けて等持院の墓地に隠したり、盗まれた看板を自治会ボックスまで乱闘を覚悟の上で取り返しに行った。

私は特段格闘技の訓練を受けたこともない普通の学生であった。しかし子供のころ競馬場や競輪場の近くで育ったこともあり、「喧嘩は度胸」「先手必勝」「大将を打て」「はじめたら引つ込まない」、そして「リーダーが先頭に立たなければならぬ」などを身体で会得していた。

教室のオルグ合戦でも、そして以下の自治会ボックスに行く場合でも私は必ず先頭に立った。私が先頭に立つので他のメンバーもついてきてくれた。広小路キャンパスでも法学部の松本賢爾が同様に乱闘ではいつ

も先頭に立っていた。そんなやりあいをしているうちに、私たちの周りには単に運動上での支持者というだけではなく、いつしか柔道、空手、ボクシング、剣道の経験者も集まってきた。

二回生そして三回生の夏休み、私は片道切符で東京の大学を訪ねた。同じように自治会民主化を闘っていた早稲田大学や中央大学、法政大学、明治大学、すでに民主化していた東京経済大学などを訪ねた。自治会ボックスなどを訪ねて親しくなれば下宿や家に泊めてもらったりした。

この大学訪問で改めて私の確信になったことは、自治会を民主化するための三条件であった。

一つは自治会選挙で勝利するためには、学生の要求に基づく活動を進めながら理論と組織戦で勝つこと。

第二は自治会選挙で勝っても、相手側が暴力で自治会ボックスを占拠したまま居すわられてはダメである。したがってその場合は暴力に勝たなければならぬ。「正義は強くなければならない」が私の持論であり、周りの仲間にも繰り返し語っていた。第三は、大学当局が選挙で勝った方を承認するかどうかであり、これが一番難しかった。

私学の場合、大学側が学費と一緒に自治会費を代理徴収し、それを学生自治会に渡す仕組みになっていた。そのため大学側が新しい執行

部を承認し、そこへ自治会費を渡してくれるかが最後の決め手であった。しかし残念ながら多くのマンス私学では暴力で居直っている旧「自治会執行部」の公認取り消しを行わず、ずるずると旧執行部に自治会費を払い続けていた。

立命館では私の三回生ぐらいまでの活動を通じて、広小路キャンパスにおいても衣笠キャンパスにおいても暴力的やりとりでは負けない状況を作っていた。

### 戸木田ゼミの聴講生に

上述したように経済学部で私たちは一回生、二回生では多数派となり始めていたが三回生、四回生では極めて小さな影響力しかなかった。なんとかしなければと思いい三回生のゼミに入れてもらうことにした。

先に私の外書講読のテキストが「賃金、価格、利潤」であると記した。担当の先生は、三池炭鉱闘争時の炭労の労働問題研究所にいた戸木田嘉久さんであった。先生は九州大学経済学部を卒業後、この研究所に入り三井三池の合理化反対闘争に関わってこられた。その経験を理論化し、おそらく日本で最初の本格的な「合理化」問題の本、「合理化」（労働旬報社）を出され注目され、立命館大学経済学の教員として採用された人であった。私は先生の家を訪ね「もっと本格的に勉強がしたいので

先生の三回生のゼミに聴講生として入れていただきたい」と頼んだ。先生はしばらく考えた後「いいでしょう」と了解された。これが先生と私の生涯の出会いとなった。

こうして私は二回生の後期から戸木田ゼミに聴講生として参加した。ゼミは「国家独占資本主義」であった。有斐閣から出版されていたシリーズ「国家独占資本主義」(全四巻)の第一巻がテキストであった。

### 京都府学連再建大会に千人

1965年の春の自治会選挙で立命館の文学部自治会を民主化したことを含めて京都においても再建全学連に結集する自治会が多数となった。10月26日に文学部自治会の学生大会が開催され、賛成223、反対17、保留7で全学連加盟決議が採択された。また11月5日には産業社会学部において自治会が結成され民主化の一步が築かれた。

11月17日、京都府学連再建をめざす京都自治会代表者会議が立命館大学で開催され、5大学から14の自治会代表が参加し再建の見通しがたった。こうしてこの年の12月11日、12日、京都府学連再建大会が京都新聞ホールにおいて開催された。

京都大学(法学部、工学部、薬学部、経済学部、看護学校)、立命館大学一部(文学部)、立命館大学二部(法学部、文学部、経済学部、経営学

部、理工学部)、同志社大学(文学部、工学部)、京都学芸大学、京都府立大学の5大学から15自治会37名の代議員、京都市立美大、大谷大学の2自治会、京大同学会(全学自治組織)から正式のオブザーバーが出席し、オブザーバー含めて約1000名が参加して行われた。大会で選出された三役は、委員長Ⅱ家野貞夫(京大法)、副委員長Ⅱ中西七生(立命大文)、桜井秀威(京大法)、書記長Ⅱ小竹義夫(府立大)であった。

なお明るる1966年3月12日、13日に開催された全学連第五回中央委員会において再建全学連初代委員長であった川上徹(東京大学)、それに中塚基一(金沢大学)、泉一郎(立命館大学二部)の中央執行委員が卒業し、梓沢和彦(一橋大学)が委員長代行に就任し、新たに平田勝(東大文)とともに立命館大学の中西七生(文)が中央執行委員に選ばれた。

### 特異な事件二つ

ところでこの1965年には特異な事件が二つ起こった。一つは国際的な事件であるが日本ではあまり注目されていなかったインドネシアの9・30事件(クーデター計画発覚による共産党弾圧)である。もう一つは立命館大学において同和(部落)問題をめぐる事件であった。

(以下次号)

## 京都人文学園65周年同窓会を開催



杉本喜代己

今年(2011年)は京都人文学園の開校65周年に当たります。開校記念日の6月5日には65周年記念同窓会が開かれました(写真)。

「燎原」2011年3月号の「この1枚」に京都人文学園の64年前の入学式の写真が取り上げられています。そして4月28日には「京都の民主運動史を語る会」で、わが青春の「京都人文学園」について語る場を設けて頂きました。この記事が「燎原」

5月号や、「しんぶん赤旗」にも紹介され、人文卒業生の何人かから葉書や電話がきました。

ホテルグランヴィア京都で開催された同窓会には、卒業生24名と元講師の岩井忠熊、永原誠両先生(ともに立命館大学名誉教授)、京都勤労者学園の田中行夫専務理事が出席しました。岩井先生は「人文学園は私の88年の人生の忘れたい記憶です。新村先生はじめ久野さん、藤谷さん等先輩たちが次々に亡くなられ、淋しい思いですが、思いがけない場で人文学園での出会いを語られ、驚き喜んだことがあります」と語られ、永原先生は、当時のメーデー歌「町から村から」を歌われ、皆がそれに唱和し一遍に60年前に戻りました。

欠席者からも思い出、近況を知らせる返信が数多く寄せられ、「燎原」本年3月号「創刊当時の『夕刊京都』」に紹介されている甲斐湛君も「人文学園といえば、私の一生の精神の基礎が造られたところですよ」と記していました。

人文学園は1946年の開校から1957年に京都勤労者学園に移行するまで昼間部2期66名、夜間部8期278名が卒業しています。この間の歳月の重みを感じます。元気な出席者からは、今回は70周年を、との声もありましたが。

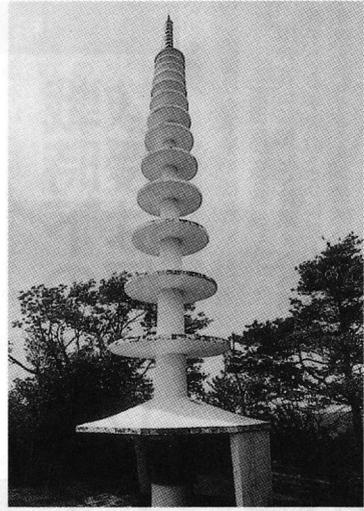
(京都人文学園1期生、元同夜間部主事。元京都勤労者学園事務長)

しんぶん赤旗のカメラマンだった藤田観龍氏が分厚い写真集『平和のアート・彫刻 戦争の記憶』を本年一月に出版したと伝えてきた。それには鳥取平和祈念塔が掲載されている。そのことについて想い出を記してみたい。

JR鳥取駅を降り立ち、中央通りの正面に見える城山に尾根が繋がる出城・雁金山の頂上に建立されている「平和祈念塔」は私が設計したものである。

1952年の鳥取火災復興のため帰郷し、地方公務員として働いて三年目、26歳の時の作品である。

旧市街地の何処からでも見られる場所を選定するため、市内各地を確かめて回り、雁金山に定めた。



## 鳥取「平和祈念塔」の想い出

### 青年時代、反戦・平和を希求して

#### 蓮佛亨

私は男兄弟四人の三男であり、1942（昭和17）年当時、長兄は戦車隊員として関東軍に所属し満州の公主嶺に、次兄は満蒙開拓義勇軍としての任務を終えた後、直ちに入隊して満州・東北部の勃利にいた。終戦直前、ソ連軍は不可侵条約を侵して侵入してきて、拘束され、黒海の北部・オデッサまで強制連行され、過酷な労働を

強制されたが、終戦四年後、終わりの引き揚げ船で舞鶴に帰国した。満州時代二人の兄からは月一回のハガキが届けられた。ソ連軍との軍事的対峙状況などにはふれず、零下30度を超える過酷な極寒の地での生活状況が伝わって来た。少年であった私の意識を反戦・平和へと向かわせた。

建立の趣旨は、市内70ヶ寺が中心となる建立奉賛会が計画し資金を集め、鳥取市に賛同と協力を求めた。結果、私が「構想案」を立て設計することになったのである。

1944（昭和19）年の大震災と共に、1952（昭和27）年の鳥取大火災など、天災地変から免れ、平和な生活を求める市民のよりどころとして「平和祈念塔」に願いが込められていた。私はそれに加えて朝鮮、満州を強引に自国の領土化し、中国へ侵略した戦争への反戦・平和への願いを希求して設計した。（れんぶつ・とおる 建築家。本学会計監査）

写真上＝鳥取市の「平和祈念塔」  
写真下＝雁金山の頂上に建立されている

#### 催し案内

日本国民救援会京都府本部結成60周年記念祝賀会 9月17日（土）午後5時30分、ルビノ堀川。会費5千円。

映画「レイチェル・カーソンの感性の森」 9月23日まで京都シネマで上映。9月19日（月・祝）午後1時30分からハートピア京都で「沈黙の春」出版50周年記念フォーラムも開催（問い合わせ電話25111001）

前進座創立80周年を祝う関西の会 9月30日午後5時半から京都ロイヤルホテル&スパで。会費1万2千円。連絡先電話075-56116300（京都営業所内）

9条京都のつどい 講演会&全体会 9月28日（水）午後6時30分、京都公会館会議場。渡辺治氏が「憲法をめぐる情勢と私たちの課題」を講演。参加費無料。河上肇記念会会報100号記念講演会 10月22日（土）午後1時30分、京都大学法経第7教室。記念講演・鳥越俊太郎「ジャーナリストの眼から見た9・11と3・11」。（資料代500円）

京都平和委員会創立60周年記念のつどい 10月22日（土）午後5時30分～8時、京都平安会館。記念講演・川田忠明氏、特別講演・畑田重夫氏。会費5000円。

11・3憲法集会 in 京都 11月3日（木・祝）円山野外音楽堂で神田香織さん（女性講談師）をメインゲストに。憲法9条京都の会主催。

京都第一法律事務所創立50周年記念講演会 11月15日（火）午後6時、京都新聞文化ホール（京都新聞社7階）。立命大名誉教授・安斎育郎「どうする日本の原

発政策」フォトジャーナリスト・森住卓「世界の核汚染と福島」。入場無料。

資料

# 戦時下の京都の大学で 教授は何をしたか

(要旨)

< 2 >

(10) 金儲けも下手ではない

(西田直二郎教授)

(5月27日)

部公職につけない事になった時、彼は研究所員は兼務であり本職でないと京大教授の地位にしがみつこうとした。

純乎たる学者のようには見えて、実は政治的立廻りもうまく、金儲けも下手でない。勿体ぶった表現をするが、深遠なものがない。国粹学者を見下すように皮肉を言ったりするが、自身も神話を持出して怪しげなことばかり言う。かつては唯物史観を若干取り入れ法論的昏迷の中にも何か歴史的真相を究明するかの如き様子を見せたが、結局似而非歴史学者でしかなかったというのが文学部国史担任の西田直二郎教授である。

(11) 握られていた博士論文

（藤直幹・中村直勝助教授）

(5月28日)

最悪人事の後継者

西田直二郎は偉い学者だと世間は思っている。京都帝国大学教授の肩書がものを言っている。彼編集の中等学校用国史教科書の売れ方は物凄く、印税収入では彼が京大教授中のナンバーワンだ。

西田を慕って京大の学生となった者は、二、三度講義をきいて首をかき上げる。三年教わって結局大した学者でなかった、と知る。

文学部の中で史学科は建物の上からも一応独立している。西田は国史研究室の主たることで満足せず、史学科全体を支配下に取めた。満州事変以来、国粹主義が力を得てくる中で、国史研究室の羽振りもよくなり、西田自身の政治力もあって史学科の人事の支配権を握ってしまった。

紀元二千六百年（1940）の元旦、「朝日」紙上に「神武天皇の聖議と国史の成迹」という庄重？な論説を寄稿し、あちこちち引っぱり風になって国体の有難さを講演して廻った頃が彼の最も得意な時代だったが、それも敗戦とともに終り、今度は大学教授を退く破目となった。

西田は国民精神文化研究所の正式所属になつていた。肩書にも京大教授と並べて国民精神文化研究所員と書き添えていた。京大の講義をサポートする研究所員の職責を果たしたと伝えられている。マッカーサー司令部からの指令で国民精神文化研究所員は全

この「資料」は、「夕刊京都」1946年5月18日から6月22日まで連載された記事の、一ノ瀬秀文氏による要約です。

も教授にもなれない。西田直二郎とのそりが合わなかったからだ。中村の論文は長い間、西田の手で握り潰されていた。どういふ訳かと訊かれると、西田は「資格なし」と答えていた。ところが終戦となり、天下の形勢変ってきたので西田は慌てて中村の論文を通じた。今年中には中村直勝博士が成立するだろう。英文学の学者たちは戦時利得は全くなかったが、不遇だった中村直勝でも、筆と口とで稼いでいた。南北朝時代が得意で、樋公をさかんに担ぎまわり、昨年（45年）春、滋賀県堅田の住友の工場で「樋公精神と大増産」という講演を行い、「七たび生れて増産にはげめ」と激励したとか。万年助教で同情されてはいるが、戦犯委員会では問題になるだろう。

（12）時流に泳ぐ医学部  
神様と商売人を使い分ける教授  
医学部フアツシヨ化の必然性

(5月29日)

京都帝国大学医学部は毎年何百人もの医者を出すが、その組織があるだけでなく、仕きたりと仁義がある。だが、それだけで「学問の府」だと思つくとまどう。毎年全国から学生が押しかけてきて、「一応秀才と思われ者が試験で残り、文科、法科などの学生と同様の過程を経て卒業。医者としての本格的な生活となり、ともかくそれは学問と研究であり、また全くそれでもない、むしろ反対のものを含んだ生活に入る。副手、助手たちは教授の回診にくっついて歩いたり、看護婦とうまくつき合わねばやっ

医科大学のプロフェッサーはあらゆるイジマシイ若者たちの希望、野心、名誉心や好学力や策謀の上に、また金持または貧乏な病人および病人の家族の上に祀り上げられた偶像として、ゴタゴタと名状しがたい王国の上に君臨している（他の学部の教授とは違う）。

しかし、この病院では神様のような教授も、世間向きでは一箇の商売人にすぎない。教授、博士の肩書と地位には世間の相場がつき、九州大学、京都大学で特診料の問題が起こつたりした。

博士、教授だけでなく、大学そのものにも値がつく。しかし、下手をすると大学や学問を売り渡してしまう危険もある。戦争が起り、国粹主義が盛んになるとフアツシヨの先走りとなつたり、敗戦になると民主自然科学者として西洋人との交際に馬力をかけたたりする。京都帝大医学部にフアツシヨ教授が戦時中跳梁を極めたのもそれだ。

(13) 病院内の帝王  
金の誘惑にはフアラフラ  
特診料周旋屋の開業

(5月30日)

昔から「医は仁術」といわれたが、それはあらゆる医者がそうしているというわけではなく、そうあつてほしいという人民の切なる願いだ。医は仁術であることもできるとし、不仁術であることもできる。ひよつとすると不仁術の場合が多く、仁術は例外かもしれない。

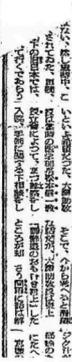
医はしかし、どんな場合でも金儲けである、不仁術であるほど金もうけなのかもしれない。天下の秀才が医学部に押すな押すなとつめかけるのも、そこが仁術を教えるからではなく、金もうけの機会としての医学を教えるからである。他の学部とちがつて、教授や博士の前には金もうけの機会が大きく開かれている。だから、その限り、彼らが俗流におもねり世間の向う方向に迎合し、同化したりするのも無理のないことである。

「外部」への門戸——それは教授たちに



### 略痰に培養

王子様を繞る



### 批判徹底せよ

肅正こそ更生の道

「夕刊京都」連載「戦火に巻きこまれていた大学」

患者を紹介して、「特診料」を稼がせる人々のことだ。その大元締の一人は京都市内に結核療養所を持ち、開業していた葦和田益三医学博士だが、この人の紹介で、戦前および戦時中に生理学の笹川久吉、内科の井上硬、生理の正路倫之助、解剖の舟岡省吾、内科の菊地武彦の各博士が各種の橋渡しをうけ、あるいは直接に日本ファアジムの元兇として、国際裁判の法廷にある平沼騏一郎、白鳥敏夫、ナチスドイツのスターマール大使らと医学部とのつながりをつくった。

#### (14) 略痰に培養

王子様をめぐる争い

医学部にルパン登場

話はさかのぼって昭和十五年(1940)、

(5月31日)

葦和田は伏見宮家の第三王子博英を医学部に紹介した。患者は痔瘻で、その手術を外科助教授の大澤達から受けたという希望であった。大澤は医学部長松本信一(の立会)によつてまず診察し、入院の上、手術の下相談をした。ところが、外科主任教授萩原博士が「教室の統制上、大澤助教授に執刀させることはまかりならぬ」とい出した。では誰にさせるのか、萩原は「自分に」とはいわずに、大澤に断れと命じたのである。大澤は「御辞退のおもむき言上」したが、簡単には受けられず、「理由薄弱」で「御聴許にならず」ということになった。そのうち症状が悪化して、王子は大学病院をあきらめ、市内二条の河村病院に入院して大澤助教授に手術を受けることになった。痔瘻のばあいは略痰検査をして結核菌を調べねばならない。検査物件は大学に送られたが、その結果多数の結核菌の存在が証明されて手術は不相当ということになった。ところが、話はこれで終わらない。検査結果が不自然で、自然に人体から出た菌としての植田助教授が再検査したところ、非病原性抗酸性菌だった。結局、手術は沙汰止みとなったが、検査標本の中に人工培養の菌を塗り込んだ犯人は誰?

#### (15) 批判徹底せよ

肅正こそ更生の道

肅正をさぼるな

(改めて、総論的な議論が再説されている。)

(6月1日)

戦争が終り、戦禍のあとをのこしながら、新しい生活様式に向つて世の中は変わりつつある。ホンのこの間までわれわれはいろいろと吹き込まれて戦争に駆り立てられていた。政治家や将軍、右翼の大物、そして大学教授の話に煽られていたのだ。その反省とともに、戦争推進を積極的に煽動した人物はキチンと肅正しなければ正しく前に進めない。とくに、大学では学問・研究、教育のあり方が正されねばならないので、大

#### (16) 惜しや気骨の出し処

黒い心 果して光さずか

(京帝大医学部笹川久吉教授)

北極星は地に墜つ

(6月2日)

このシリーズ企画の反響は大きく、激励、応援、また情報・資料も寄せられる。京帝大医学部笹川久吉教授が「あんな共産党の三文(さんもん)新聞記者に何ができるか」といわれたという。共産党とか三文記者とかいう批評はさすがに大学教授らしく御上品だが、このように昨日仰言ったことは今日キヤッチできるのである。笹川教授はどんなにエライか。沢山の兼任を持たれている。京都市大のほか、高槻医専教授、同医大教授、武専講師、三重医専講師、岐阜医専講師、京大医専講師、化研講師、陸軍科研嘱託、陸軍糧秣廠嘱託

その他民間営利団体数ヶ所に関係される。われわれが心配するのは笹川教授が葦和田博士の紹介で例のブラック・ドラゴンこと黒龍会の会員として令名を連ねておられることだ。連合国側でもいづれ問題になる秘密結社の名である。問題なのは、大学教授がそのような秘密結社の会員ではなかったかとの疑いを生ぜしめていることだ。あのきびしい戦禍の中で、はつきり仰ぎみることのできる北極星が京大医学部の上ならんと輝いていなかった。それはともかく笹川教授は昨年八月十七日以後は民主主義の宣伝家に転向、多忙を極めてゐる。解剖学の舟岡猶吾教授は昭和十六年六月に東邦書房から「東亜星座における日本」(Japan in Spheroid)という独文の上下二巻一六二頁の本を出した。とくに下巻は侵略戦争を鼓吹、今ではバカバカしくて読めもしない。「細胞国家学説」という医学者らしい全体主義的国家観を煽ろうとしたもの。

## BOOK

### 中村和雄・脇田滋著 「非正規」をなくす方法 雇用、賃金、公契約

来年の京都市長選に再度挑戦する中村和雄弁護士と脇田滋・龍谷大教授(労働法)の共著。諸外国と比べても異常に肥大化した日本の非正規雇用。貧困を構造的に生み出す働き方の実態と歴史をふまえて、人間らしい労働に向け現状をどう打開するか、雇用、賃金、均等待遇、公務労働など課題ごとに豊富な具体例で到達点を解説している。

労働法の分野とともに連携してたたかってきた弁護士と研究者の見事な共同作業で展望を示す本になっている。とりわけ京都の企業や学園、市役所のいくつもの例がとりあげられ興味深く、分かりやすい。例えば、市の放置自転車撤去作業。入札で参入した業者がさらに下請けに出し、ピンはねされた作業員は最低賃金しか支給されない実態など。

中村氏の市長選の公約の一つ、ワーキングプアを解消するための「京都市公契約条例」制定の効果も説得力がある。

(新日本出版社 四六判222頁・本体1600円)

(ゆ)

忘れ得ぬ人

生誕100年、

西山卯三先生の思い出

中島 晃

(弁護士・まちづくり  
市民会議事務局代表)

建築学と都市計画学の泰斗であり、戦後の学会をリードしてきた西山卯三京都大学名誉教授が亡くなられてから、早いものです。17年が経過した。また今年は、1911（明治44）年に生まれた西山先生の生誕100年にあたる。

そこでこの機会に、景観保全の住

民運動とのかかわりを中心にして、「西山卯三先生の思い出」について、述べさせていただくことにする。

一貫して庶民の立場からの研究

西山先生が最初に取り組んだのは「庶民住宅の研究」であり、この研究のなかで、「食寝分離論」―食堂と寝

室の空間を、同一空間に転用して使うのではなく、それぞれ独立空間として住居平面を構成する―を明確に打ち出した。

この「食寝分離論」は、戦後の庶民の住宅水準の改善をめざす要求を支えるうえで重要な役割を果たした。そして、西山先生は、この「庶民住宅の研究」により工学博士の学位を授与され、日本建築学会賞も受けている。

史への郷愁ではなく、資本による無軌道な開発の嵐から、住民の生活環境をどうやって守り抜くのかという視点に立って、研究活動に取り組んできた。

このため、先生は大学の研究室に閉じこもるのではなく、常に問題が起こっている現場に駆けつけて、その現場から問題をほりおこし、研究と理論を深めるといふ態度を貫いた。その研究の足跡は、沖縄の竹富島から北海道の小樽運河まで、全国各地に及んでいる。

こうした西山先生の景観問題に取り組む研究の視点を端的に表現したのは、次のような発言である。

「景観というのは、人間の住む地域環境のもっとも総括的、かつ直接的な表現形象です。人間は環境のなかで生存し、生活しております。景観の変化は、地域の人間生活に及ぼす変化を敏感に反映するもので、住民の人権に関わる重大な問題です」（かものがわブックレット『京都の景観 私の遺言』より）。

景観を住民の人権に関わる重大な問題と捉える視点は、まことに鋭いものがあり、そこに先生の真骨頂がある。

京都タワー建設をめぐる景観論争

西山先生は京都の歴史的景観をこ



西山卯三（にしやまうぞう）

1911年3月1日、大阪市生まれ。1933年、京都大学工学部建築学科卒。41年、同工学部講師、46年、同助教授。61年、同教授。66年、歴史的風土審議会専門委員（20年間）。74年、京都大学退職、名誉教授に。43年、「庶民住宅の研究」で日本建築学会賞、48年「これからのすまい」で毎日出版文化賞、66年「住み方の記」で日本エッセイストクラブ賞。著書多数。1994年4月2日、逝去。

このように西山先生は、一貫して庶民の立場から、建築・住宅問題や都市計画に関する研究に取り組んだ。こうした先生の研究の延長線上に、1960年代以降、町並み保存や景観保全に関する一連の取り組みがある。

西山先生は、町並みや景観保全を、たんなる歴

# 京の景観保全運動を牽引

よなく愛し、古都京都の景観保全に全力をあげて取り組んできたことは周知のとおりである。おそ

らく、西山先生が京都の景観問題に取り組むことになったのは、1960年代半ばに起こった京都タワーの建設をめぐる景観論争が契機となったと思われる。

京都タワーの建設によって、京都の経済的な地盤沈下を回復しようという推進論に対して、それは東京タワーや大阪の通天閣の模倣にすぎず、京都の歴史的景観にふさわしくないという反対の声が広がった。西山先生は、タワー建設反対の先頭に立てられて、古都京都の景観保全の重要性を訴えた。

タワーの建設は強行されたが、タワー建設をめぐる論争は、京都の景観に対する市民の関心を大きく高めるとともに、行政に対しても積極的な対策の確立を促すものとなった。この論争は、その後、第一次景観論争とよばれることになったが、西山先生がこの問題に取り組むなかで、京都の歴史的景観の特質を明確にしたことは、景観保全をめぐる運動の理論的なよりどころとなった。

## ノッポビル反対市民連合の代表に

このタワー論争を経て、再び京都でホットな景観論争がまきおこった

のは、1980年代後半から90年代初頭にかけて問題となった、京都ホテルと京都駅ビルの高層化であった。これは第二次景観論争とよばれることになったが、学者、文化人だけではなく、まちづくりに取り組む住民運動や市民団体、労働組合などのほかに、仏教会までも巻き込んで、全国的にも注目される大きな論争へと発展した。

西山先生は、ノッポビル反対市民連合の代表として、文字通りこの運動の牽引車の役割を果たしてきた。また同時に規制緩和による都市再開発や都市改造が、市民に環境悪化と暮らしの破壊をもたらすことを鋭く指摘して、いま京都は「応仁の乱」以来のまちこわしの危機にさらされているとの警鐘を打ち鳴らした。

西山先生の晩年は景観破壊とまちこわしに對峙し、それによって引き起こされる環境悪化と暮らしの破壊から住民の人權をいかに守り、住民の権利をどう確立していくかに向けて、理論と運動の両面にわたる取り組みを、旺盛に続けられる日々であった。

西山先生は、晩年は耳が少し不自由になられていたが、いつも集会な

どで、参加者の発言に耳を傾けながら、手のひらにおさまるような小さなメモ用紙を取り出して、そこにこまかな字でびっしりと書き込みをして、絶えず理論的な思索と研究を深めていった。その真摯な姿勢には、いつも心うたれる思いがした。

## 住民訴訟で陳述のあと倒れる

こうした取り組みを続ける中で、1994（平成6）年2月9日、京都駅ビル高層化の差止めを求める住民訴訟で法廷に立ち、駅ビル高層化計画について、歴史都市京都の景観保全とまちづくりのうえから決して許してはならないことを、自らの学問的見地にもとづいて、約1時間半にわたって陳述された。

この法廷で

の陳述は、西山先生が京都の景観保全にかけた学問的な情熱と理論的な研究を凝縮したものであった。西山先生は、この

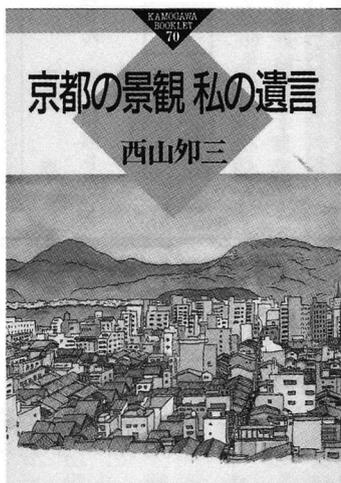
法廷の翌日、

くも膜下出血で倒れ、約50日間にわたる闘病生活を続けられたが、4月2日、遂に力尽きて帰らぬ人となった。

この法廷での陳述は、文字通り、京都の景観保全に向けた西山先生の遺言となった。（この陳述は、先ほどあげた「かもがわブックレット」にまとめられている）

2007（平成19）年3月、京都市は市内全域にわたって建物の高さ制限を強化した新景観政策を決定した。これによって、西山先生が生涯をかけて取り組んできた京都の景観保全に向けて大きな前進がはかれることになった。

そのことを思うと、西山先生の景観保全にかけた熱い想いところろざしは、多くの人々に受け継がれ、いまなお脈々と生き続けているということが出来る。



最後の瞬間まで景観保全を訴えていた。JR京都駅高層化差止め住民訴訟における証言は、「京都の景観 私の遺言」として出版された。（かもがわブックレット、560円）

# 会員消息



「原爆展」から60年、毎日新聞が連載  
1951年7月14日から10日間、京都  
駅前丸物百貨店で京大同学会が開いた  
「総合原爆展」は米占領下にもかかわらず3  
万人が入場した。毎日新聞京都版は8月13  
日から4回、「総合原爆展から60年」として  
連載。川合葉子、小畑哲雄、蓮佛亭、高橋  
正立さんが紙面に登場して、当時の模様や  
「掘り起こしの会」の活動を語っている。

## 岩井圭子さん、お別れのつどい

7月24日(日)の午後、「岩井圭子さん  
お別れするつどい」が開かれた。準備され  
た席では足りないほどの参加者で会場はい  
っぱいに。新日本婦人の会60周年の記念誌  
に執筆準備中での逝去、プロジェクト  
を使った思い出を偲ぶ写真、周りを元気に  
そして明るくする故人のエピソードに溢れ  
たお別れの会となった。「燎原」(178号)  
では「戦後伏見の女性運動を語る」という  
タイトルで、新婦人をはじめとして伏見、  
そして京都での戦後の女性運動についての  
思い出を寄稿頂いた。

## 「きたぐに」に春を

志摩 肇(ひまわり合唱団団友会)  
7月16日〜20日の間、日本共産党文化後  
援会が被災地(福島県南相馬)に「京野菜  
と文化お届けたい(隊)」を派遣しました。  
私も誘われたのですが病後のため辞退、せ  
めて歌だけでも「救援激励歌」二曲を創  
作、演奏録音を現地で披露してもらいまし  
た。そのうちの一曲。

「きたぐに」に春を(作詞・作曲 志摩)

一、押しつぶされた街並みも

波に吞まれたあの人も

思い出悲しみ耐えられぬとも

今の今を大切に

(繰り返し) 寒い「きたぐに」も

春はきつと来る

生きぬく「希望を」

失わないでね

二、かねてのいましめ耳かざす

人を傷つけ ぐらしを壊す

悪魔の放射能まき散らす

つぐない必ずさせるぞと

(繰り返し) 「勇気を」……

三、吹雪に倒された山の木も

なだれに埋もれた草の実も

ときが来れば とき来れば

たくましく

やがてよみがえり萌え上がる  
(繰り返し) ……「力を」……

## 退会

小林綾さん・桑原英武さん・奥村和郎さん

## 編集後記



▼1951年、ちょうど60年前にいろんな  
出来事があった。京都総評結成は本号で取  
り上げたが、3月17日に京都労働救済会  
(のちに国民救済会)が誕生、4月23日に  
は日本機関紙協会京滋支部が設立された。  
7月には京大同学会が「原爆展」をデパ  
トで開催、11月には天皇が入浴し「京大天  
皇事件」が起きた。12月には市電・市バス  
が3日間全面ストライキ。すでに「燎原」  
に載ったものも多いが今のうちにぜひとも  
記録しておきたい。

▼ページ数を増やし発行しているが、「会  
」の財政は赤字つづき。なんとか会員を増や  
して、とは思いますが会員の超高齢化で減少傾  
向が続いている。残念ながら次号からペー  
ジ数を元の12頁に戻し、印刷方法も変えて、  
少しでも安く仕上げることに務めたい。全  
国的にも高く評価されている「燎原」の活  
動を守り発展させるため、カンパも含め一  
層のご協力をお願いしたい。

▼人名の読み方は難しい。前号から執筆し  
ていただいている佐次田勉氏は「さした」  
と読むとのこと。須田稔先生から指摘があ  
り、かもがわ出版から98年に出た著書「沖  
繩の青春―米軍と瀬長亀次郎」の奥付を見  
て分かりました。「さした」は誤りですの  
で訂正します。(湯浅)

# 京都の民主運動史を語る会9月例会 治安維持法犠牲者の足跡を訪ねて

とき  
9月30日(金) 午後2時

ところ  
かもがわサロン

(上京区出水通り堀川西入かもがわ出版内)

語る人

岡本 康さん

(治安維持法犠牲者国家賠償  
要求同盟京都府本部会長)

## かもがわ出版の残部僅少本を特別提供します。

## 売上げ金は「燎原」発行費にも!

き、送料と消費税分はサービスでお送りします。●…し  
かも、売上金から「燎原」の発行費用に寄付いたします。  
この機会にぜひご注文ください。(売り切れの節はお許し  
ください)

かもがわ出版 (担当 湯浅俊彦)

電話075-432-2934 fax 075-417-2114

## 「燎原」読者の みなさんへ

●…かもがわ出版は創業以来25年、この間、京都の民主  
勢力に支えられて発展してきました。●…最初の本は後  
藤靖・藤谷俊雄監修『近代京都のあゆみ』(在庫切れ)  
でしたが、京都の革新的伝統や闘いを記録した著作を多数  
刊行してきました。絶版となっている本もありますが、  
『目でみる京都の民主運動史』(湯浅貞夫著)など僅かな  
がら在庫している本もあります。●…そこで、本号に同  
封した注文リストで申し込んでいただければ定価の20%引